



International Institute of Multi-cultural Studies

特定非営利活動法人

## 国際比較文化研究所

Newsletter

Vol. 7 No. 3 2006年 9月

### 鷺の宮卓話

所長 太田敬雄

レストランなどで時々聴覚障害を持った方々の手話による会話を見かけることがあります。蝶が群れて舞っているような、あの静かな賑わいに私は何度も見とれたものでした。

最近教わったことですが、聴覚障がい者\*のコミュニケーション方法には口話法(口の形を読み取ったり、発声訓練主流)、聴脳法(残存している聴力を活用し補聴器の両耳装用。高じては人口内耳の o.p)、そして手話法などがあり、それらの功罪について喧々諤々と主張し合う世界があるのだそうです>(\*ここ数年「障害者」を「障がい者」と表記する傾向あり)

手話法でも先天性の聴覚障がい者と、進行性難聴などで成長期には聴力があつたのに何等かの理由で障害を持った人では、当然日本語を獲得する過程がずいぶんと違うわけですから、手話も《日本手話と日本語対応手話》に分かれており前者は先天性の人たち、後者は中途失聴者が主に使用しているのだそうです。

いわゆる「健常者」は障害を持った人のことを、本来有るべき機能が欠けている人。従って、健常者より劣る人との見方をしがちですから、手話の否定や人口内耳の推進に拍車がかかる傾向があるようです。けれども、視力の無い方は肌で光の存在や方向を感じることが出来たり、あるいは聴覚の無い方はヘレンケラーのように空気の振動を手の平で感じて周囲の「音」を理解したり出来るようになります。いわゆる健常者には無いものを持つのです。その意味では障害を持った人たちから見ると、健常者は人が本来持つことが出来る機能を十分に発達させていない大変不自由な存在なのかもしれません。

色々と考えていきますと、聴覚障がい者の視点ではなく、多数者である「健常者」の視点で聴覚障がいを持った方々の教育がなされてきたことが見えてきます。例えば、聞こえない人ための発音訓練や聴脳訓練は「健聴者」に近づけるための訓練で、決して聴覚障がいを持った...けれども同時に別の才能を開花させている...人のためでは無いようなのです。それらの訓練は聴覚障がい者にとっては精神的な負担になっているとも聞きます。

10年ほど前に日本手話を言語とする聴覚障がいを持った方が「聾文化宣言！われわれは少数民族としての日本人」という論文を発表されて話題になったそうです。

手話は確かに独立した言語です。とすると、手話によるコミュニケーションを主とする一つの文化がそこにあります。ですから聾文化は日本文化のなかの少数民族文化と理解して良いのでは無いでしょうか。異なる文化としてお互いに対等な立場に立ったとき、健聴者は思いのほか多くの貴重なことを聾文化から学ぶことが出来るようになると思います。

その昔、ヘレンケラーが群集の中を歩きながら、手の平を高く掲げ、空気のどよめきを感じ取っていた姿を思い出します。このような分野でも多文化共生を積極的に考えていきたいものです。(聴覚障がい者の分野に詳しい友人、町田市在住・八木道夫・由利子様の私信からかなりの部分を引用させていただきました。)

## 対談「イスラム教徒として生きる」～鮎川佳緒理さんを迎えて～

8月24日、安中市国際交流協会と共同で上記の対談を持ちました。当日は安中市長、岡田義弘様、安中市教育委員長中澤四郎様はじめ多くの方々にご参加いただきました。遠く、横浜から駆けつけてくださった方もあり、感激しました。当日はイスラム教のことなどを中心に有意義なお話を聞く時を持つことが出来ました。

国際交流協会事務局の白石様から「協会にとって、比較研究所との連携による講演会は大変刺激的でもあり、多くの物を学ぶ機会を与えられたことに感謝申し上げます。鮎川さんには遠いところから安中までこられたことに大変ありがたく感じました。」とのコメントを頂戴しております。



### 鮎川さんのお話を聞いて

狩野真由美

8月24日（木）安中市文化センターで鮎川佳緒理さんのお話『イスラム教徒として生きる』を聞かせていただきました。鮎川さんはマレーシア人のご主人との結婚を機にイスラム教に改宗した方です。今は高知県在住で、頭をスカーフで覆ったヒジャブと呼ばれるスタイルで日常生活を送っていらっしゃいます。この日は鮮やかなピンク色のスカーフをされていました。

結婚前の鮎川さんはイスラム教に関する知識はなく、テロの報道を見ては「怖い宗教だ」と思っていたそうです。でも、ご主人と出会ってイスラム教には想像していたものと全く違う教えがあることを知ったそうです。そして、お祈りの姿を見たとき、その美しさに感動し、イスラム教への改宗を決意されました。

イスラム教は他人に対する思いやりを重んじ、互いに助け合うことを強調しているそうです。一ヶ月間断食をするラマダンの時も、貧しい人々のために寄付をする習慣があるそうです。大半のイスラム教徒は平和を望み穏やかに生きているとおっしゃっていました。

鮎川さんは「過激派の人たちはコーランの解釈が偏っているのではないかと思います。私は自分の目的のためにイスラム教という宗教を利用しているという見方をしています。彼らは聖戦（ジハード）の本当の意味をわかっていないのではないかと。私はジハードは人を傷つけることで達成するものではなく、精神的な戦いであると理解しています。テロを起こす人たちはコーランの言葉に隠されている本当の意味を理解していないのです。きちんと勉強して理解すれば解釈の偏りに気づくと思います」と話していました。

全てのイスラム教徒がテロを起こすわけではないと分かっているながらも、悲惨なテロ報道の影響で私はイスラム教にはあまり親しみが持てませんでした。でも鮎川さんのお話をお聞きして、イスラム教に関する知識がない状態で偏見を持つことの残酷さに気づきました。ひたむきに信仰をしている大勢のイスラム教徒がどんなに肩身の狭い思いをしていることでしょう。過激派の人たちにはコーランの本当の意味に早く気づいてほしいと思いました。そんなことを考えるきっかけを与えてくださった鮎川さんに心から感謝しています。

最後に強く印象に残った鮎川さんの言葉を紹介します。「宗教を信じるのが平和につながるという言葉は言い切れません。ですが何も信仰がないと自分の目的が見えてこないのです。自分の方向性がわからないのです。宗教の教えをヒントに精神を高めて自分を向上させ、社会に貢献することが平和につながると思います」。

鮎川さん、貴重なお話をありがとうございました。

## 鮎川さんを迎えて

野口紀子

今回の対談を聞きに行き、何年か前、ホームステイに来た「アンギちゃん」というインドネシア人の女の子のことを思い出しました。彼女もイスラム教徒だったため、食事には気を遣ったことを覚えています。同じようにホームステイを受け入れた家庭の中には、お祈りの時間に合わせ、出先から何度も家に帰ったという話も聞きました。日に5回もお祈りをするということを知らずに、一日中いろいろな場所に連れ回してしまったことを後から反省し、アンギちゃんに申し訳ない気持ちになったことも思い出されます。

結構安易に受け入れを決めてしまったのですが、彼女が話せたのはインドネシア語のみ……。片言の英語で、意志疎通は何とかできるのだろうと考えていた我が家では、最初多少困惑しましたが（インドネシア語の辞書なんて持ってないし……）それではと開き直り、日本語とボディランゲージでコミュニケーションを図ったのですが、「伝えたい！」という気持ちがあれば何とかできるものだと、あらためて感じました。

彼女が私たちには無い習慣をもっていることを我が家の娘たちも理解し、興味深そうに（でも少し遠慮がちに）見ていたことを覚えています。ほんの何日間かのことでしたが、イスラム教との方々には馴染みが薄かった我が家では、とても印象深い出来事でした。

そして今回、「イスラム教徒として生きる」鮎川さんのお話もたいへん興味深いお話となりました。特に印象的だったのは、彼女がイスラムのお祈りを見て、それがとても美しいものに見えたことが発端となり改宗をしたということでした。彼女の感性の素晴らしさと行動力に敬服するとともに、彼女の決断をご両親やご主人を始め、職場の方々など、彼女を取り巻く周囲の人たちが、受け入れているということにも感動しました。

また、もう一つ感動したのは、今回の対談に参加した安中市国際交流協会と国際比較文化研究所会員の他文化理解に関する意識レベルの高さです。あれほど活発に質問や意見が飛び交う講演会や対談に、私は出席したことがないのではないかと思うくらいの会となりました。時間が許せばまだまだ話が終わらない・・・という雰囲気の中での閉会となりましたが、第3弾も期待しつつ、それまでには私の意識レベルも上げておこう！と心に決めたのでした。

## これからの研究所の活動予定

### 1、 東京での研究会予告

前号でもご案内しましたが、今月末には東京で研究会を開催します。お一人でも多くの会員の皆様のご参加をお待ち申し上げます。特に群馬での研究会にはなかなかお出でいただくことの出来ない会員の皆様とお目にかかるチャンスと考え、楽しみにしております。

テーマ：森の有無と文化の関係 ～特にアジアの文化について～

講師：坂口春海氏（元国連開発計画職員。国際比較文化研究所会員。）

聞き手：研究所長 太田敬雄

日 時：2006年9月30日（土）午後6時～8時

会 場：駿河台大学法科大学院校舎 〒101-0062 千代田区神田駿河台 2-9-8

TEL：03-5259-3377 （JR 御茶ノ水駅下車、徒歩6分）

主 催：NPO法人国際比較文化研究所・NPO法人森の文化フォーラム

参加費：無料

申 込：特に申込は必要ありませんが、連絡・問い合わせは国際比較文化研究所まで。

FAX：027-382-6393 あるいはMail:mtharunac@xp.wind.jp

講師の坂口氏は1946年生まれ。群馬県立高崎高等学校卒業後、元駐日アメリカ大使、ジョゼフ・グルーにちなんだグルー奨学金を受けて渡米。Bates Collegeで心理学専攻。

日本青年海外協力隊員などを経て、1978年からは国際連合開発計画職員として活躍。

長期（1年以上）赴任した国だけでも、中国、ネパール、アフガニスタン／パキスタン。最後はパプアニューギニアに2000年から2004年UNの現地コーディネーターとして活躍されました。坂口さんの豊富な経験からアジアの文化について大いに語っていただきます。

## 2、『名作の舞台裏 IN ぐんま

### ～「車輪の一步」から見るボランティア活動の流れ～

前号でもご紹介しましたように、今年は群馬県で開催される運びとなりました**第15回全国ボランティアフェスティバル（11月3日～4日）**の分科会の一つを財団法人放送番組センター、放送人の会、群馬NPO協議会と共に立ち上げます。

「車輪の一步」は山田太一脚本、鶴田浩二主演で1979年にNHKから放送されました『男達の旅路』シリーズの一話です。このシリーズでは毎回社会の問題を取り上げ、そこに鶴田浩二演じる警備会社のリーダーと若き警備会社のスタッフが関わっていく中で、その問題にメスを当てたシリーズです。「車輪の一步」では車椅子生活者の社会進出の一步を描いて評判になった作品です。

11月4日の分科会では午前9時から作品鑑賞、10時半から演出家 **中村克史氏（司会）**、脚本家 **山田太一氏**、俳優として車椅子生活者を演じた**斉藤洋介氏**、**斉藤とも子氏**をお迎えして、この作品が出来てきた「舞台裏」を語り合ってください。

折角の機会ですので、一人でも多くの方にご来場いただきたいと思います。研究所の方で参加者をまとめて、「団体会員」として登録しますので、同封のチラシの裏面に必要事項を書き込んで、研究所宛ファックスして下さい。（振込用紙を同封しますので、分科会参加費1,000円は研究所宛に振り込んでください。まとめて実行委員会の方に送ります。）

なお、この会報と共に振込用紙を同封しますので、該当欄にチェックし、必要事項<氏名（ふりがな）、性別、年齢、住所、電話番号>を記載してご送金いただければ申込用紙は省略していただいて結構です。チラシを活用してお知り合いをお誘いいただければ幸いです。この「団体申込」の受付は9月末日までとさせていただきますが、参加希望者も多いことが推測されますので、お早めにお申し込み下さい。詳細はチラシをご参照下さい。

放送人の会が毎年数回横浜で開催している「名作の舞台裏」は200名定員の会場に入りきれず、希望者から抽選で入場者を選んでいると聞きます。

また、全国ボランティアフェスティバル全体を知りたい方には、前回お送りしたパンフレットの残部がまだありますので、お申し出いただければお送りします。

### 「名作の舞台裏」ボランティア募集：

11月4日のイベントをお手伝いいただくボランティア、ならびにそれまでの広報活動をお手伝いくださるボランティアを募集しております。

### 3、「韓国語・韓国文化入門講座」

4月から開講しておりました「韓国語・韓国文化入門講座」には25名の受講生を与えられて、毎週あんな樞文化センターで熱く学ぶときが持たれてきました。朴惠蘭（パク・ヘラン）先生の懇切丁寧な指導の下、受講生の皆さんは充実した学びの時間を過ごしてこられたことと思います。この春期講座も今月で終わりますが、皆さんの熱い要望に答えて、秋期も継続して開講することとなりました。

秋期は基本的に前期の継続になりますので、全くの初歩からというわけには参りませんが、これまでにある程度韓国語を学んでこられた方の参加は定員の範囲内で可能かと思われます。募集要項を同封しておきますので、これからでも参加を希望される方は講座責任者の田中福姫さんにお問い合わせ下さい。



韓国語講座では教室での言葉の学習を中心にしながら、何度かは韓国料理を作る時間など、言語学習を超えた学びの時をもちました。9月の21日には前期修

了式も予定されています。後期、また皆さんが新しい気持ちで韓国語と韓国文化の学習に励んでくださることを期待しています。

**韓国研修旅行** 韓国語・韓国文化入門講座の延長として、韓国研修旅行を計画しています。時期は11月下旬の予定で二泊三日で計画しています。早朝に安中を出発して午前の便でソウルに向い、三日目の夜の便で帰国の予定です。基本的には講座受講者を対象としていますが、人数に余裕が有る限り講座受講者以外の希望者も受け入れる予定です。後期の講座から受講したいとお考えの方、また講座の受講は諸般の事情で出来なかったけれども、ぜひ韓国に行ってみたいという方は田中さんまでお問い合わせ下さい。

先日も田中さんと旅行の打合せをしてきましたが、充実した旅行となるとの確信をもっております。日程や経費をここでお知らせできないのが残念です。

**寄稿： 「鷺の宮卓話」によせて**

副理事長 栗原 優

毎回のニューズレターの「鷺の宮卓話」を私はとても楽しみにしている。所長の随筆を拝読できるだけではなく、世相や社会を反映しているからである。

さて、先日のニューズレターに「雑草」のことが取り上げられていた。私自身、小学生の頃から植物、特に高山植物があり、当時（今から40年近くも前のことになるが）2,000円以上した『原色 高山植物図鑑』を両親に買ってもらい、毎日毎日それを眺め、名前を覚えようとしていた記憶がある。高山植物は、概して色鮮やかで、可憐なものが多い。しかし、山に行ってそれを実際に見に行く機会には、そう恵まれるはずもなく、私は庭や道端の草花にも興味を持つようになった。そして、その植物の名前の由来や、開花時期などを知るようになった。（勿論趣味で、食用なのか、或いはどこに毒があるのかも調べた。このことは、高等学校当時、生物学研究会というクラブにも属していたので、食物を何も持たず山に入り一泊し、自分たちで食物を調達し、それを煮込んで食べるという所謂「水炊き」にも役立った。）我々が名前を知らない植物は沢山ある、いや、知っている植物の方が少ないであろう。そし



て、我々は概して、その辺に生えている名前のわからない草を「雑草」と呼ぶ。そして大抵厄介なものとして扱う。しかし雑草にもれっきとした名前があるはずである。我々の知らないものだけを「雑草」として一括りにしているだけなのである。しかし雑草は強い。かつて近鉄バッファローズの鈴木投手が「わいは雑草や！」と言ったことがある。怪我をしても、負け続けても、体調不良でも必ず立ち直る、という意味である。そして雑草は、踏まれても踏みにじられても、新たな芽を出す。私たちの多くもある意味においては「雑草」である。

ある宗教の言葉に「節から芽が出る」という言葉がある。私の座右の銘である。「節」とは挫折を意味し、そこから人間は再び新たに伸びていかねばならない。ということであり、「その「節」を契機にして、努力すれば必ず報われる」ということをも含んでいる。人間は一生のうちに大なり小なり何度かの「節」を経験する。私も「節から芽が出る」ように、日々、神々に感謝しそして努力し、「雑草」のように生きていきたいと思う。

最後に、植物に造詣の深かった昭和天皇の御発言で、特に私の印象に残っているお言葉を紹介したい。「雑草」という名前の植物はない。」

**会員動向 <2006 年度新入会者>** 前号の新入会者紹介で村中祐生様が漏れておりました。大変失礼しました。7月28日以降8月末までの入会は次の方々です。(敬称略) 笹井くに子、中村尚雄、下山公子、木暮稔、岡田義弘、斉藤恭子、中嶋敬子、ほかに匿名一名。

**<会費納入状況>** 2006年7月25日から8月31日までのご報告です。いつも研究所の活動を支えていただいて有難うございます。白倉智子(06)、小林慎樹(06)、小野幸子(06)、佐藤直樹(04,05,06)、森村英司(06)、井田律子(05,06)、福田英作(06)、斉藤恭子(06-10)、高橋美奈子(04,05,06)

**<寄付>** 次の方々にご寄付をいただきました。有難うございます。研究所の活動のために大切にに使わせていただきます。

白倉智子、井田律子、木暮稔、福田英作・洋子、岡田義弘、斉藤恭子、匿名。(計44,000円)

**<会費納入のご寄付のお願い>** 会員の方で、会費未納の方には未納期間を記した振込用紙を同封させていただいております。現在、研究所の活動はほぼすべて会員の皆様の会費とご寄付でまかなわれております。皆様の変わらぬお支えをお願いします。

なお、今回は「名作の舞台裏」の参加費振込みの便宜を図るため全員の皆様に振込用紙を同封しております。参加費はすべてボランティアフェスティバル実行本部に納めるもので、研究所の活動経費には組み込まれません。

**<編集後記>** ☆今年度に入って、やっと国際比較文化研究所としての本来の活動が動き始めてきた観があります。現在もまだ、幾つかの研究会の準備を進めている最中です。乞うご期待。☆「名作の舞台裏」のチラシをお届けするために、予定より早くこのニューズレターをお届けすることになりました。☆最近「ニューズレター」を『榛名山麓みどりの大学』でご協力いただいた皆様、そして、これまでの研究所活動にご参加下さった皆様にお送りさせていただいております。少しでも多くの方に国際比較文化研究所の活動を知っていただきたいと願っております。ニューズレターの配布も研究所の「多文化間の相互理解に基づく地球社会の平和の実現」に向けての大事な活動とすることが出来るよう、内容の充実を図って参りたいと思います。(太田記)

**Newsletter 発行：特定非営利活動法人国際比較文化研究所**

事務所：〒379-0124 群馬県安中市鷲宮3413-3

電話：027-382-5998 FAX：027-382-6393

ホームページ：<http://www8.wind.ne.jp/mthc/>

e-mail：[mtharunac@xp.wind.jp](mailto:mtharunac@xp.wind.jp)

郵便振込口座番号：00510-0-61974 名称：国際比較文化研究所

